

■羽地朝秀(尚象賢)  
はねじちょうしゅう  
吉原遊郭始・1617=

薩摩侵攻で衰退した琉球王国を立て直すべく、薩摩コネクションを築いて、近世的な国家に転換させた。

薩摩藩侵攻に敗北し、その支配下に入って8年後、琉球王国首里で、第2尚氏王統尚真王の長男の血筋の羽地四代目朝泰の四男に生まれる。

支倉常長帰国1620= 3歳：敗北時'子々孫々にいたるまで薩摩藩に背かない'との誓約書を書かされた尚寧王が、傷心のまま、死去、のちに摂政になる具志川王子尚享が、乳母に抱かれた朝秀に会った際、'いまだかつてこのように器量の優れた子を見たことがない。後日、琉球に"黄金のたが"をはめるであろう'と言い、教育したという。

人身売買禁止1626= 9歳：

薩摩藩に年貢を上納し、中国との交易も管理され、士族層は政治に関心を失い、祭祀を掌る神女や女官たちが幅を利かせ、役人への賄賂や不正が横行、重税を課せられた農民らは土地を捨てるなどするなか、

徳川秀忠没・1632=15歳：薩摩藩主の侍読で、尚豊王の侍講として来琉していた儒学者泊如竹の講義を受け、彼の師南浦文之の学を伝授されて、のちの「中山世鑑」の南浦史観に繋がる一方、政治経済に興味を抱くようになり、

参勤交代始・1635=18歳：豊見城間切の大嶺を賜り、羽地の領地を相続するまで、"大嶺"を称する。

東照宮社殿・1636=19歳：琉球は薩摩藩に訴え、薩摩藩が、長崎のオランダ商館にかけ合って譲り受けたオランダ旗を掲げて何度か攻撃を免れたものの、その後も、海賊の被害が頻発したため、薩摩藩の許可の下で自衛、この間、国中の村々を巡って、田畠や百姓の様子等を実地検分し、地元の老人たちから話を聞いて廻る。

寛永飢饉始・1640=23歳：尚豊王の死去した年、家督を継ぎ、羽地間切の按司地頭となつた。

家光鎖国完成1641=24歳：

寛永飢饉終・1643=26歳：幕府が諸大名に家系図編纂を命じいたものをまとめた「寛永諸家系図伝」が完成した影響を受けてか、

明滅亡・・・1644=27歳：薩摩による税収に加え、明清王朝交替の影響で進貢貿易の不振になり、さらに財政悪化するなか、尚質王が、当時の摂政金武王子朝貢や三司官の大里良安に命じて広く旧僚や古老から聞き取りを行い、

御蔭参流行・1650=33歳：それらをもとに、\*尚質王の命により、琉球王国初の正史「中山世鑑」の編纂を行う。

徳川家光没・1651=34歳：

承応事件・・1652=35歳：羽地間切の総地頭となり、

野郎歌舞伎始1653=36歳：

明暦の大火・1657=40歳：

人身売買禁止1658=41歳：王命を受け、翌年にかけて、初めて薩摩に赴任すると、藩重鎮らとの親交に努めるが、

・・・・・・1660=43歳：失火により首里城が全焼、王国にもはや再建する力は無く、薩摩藩に経済的支援の請願を行うべく、

清帝国始・・1661=44歳：翌年にかけて、二度目の薩摩赴任、百姓たちに課せられる薩摩への出米、薩摩が琉球に課している税の减免など請願するも、薩摩藩も財政が悪化していたため許可されなかつた。この際、新納又左衛門久了から薩摩の制度や仏教の教義を研究して帰るようとの注意を受けるとともに、"通外"の号を贈られている。

松平信綱没・1662=45歳：仏教徒による結党が問題視され、江戸幕府が、出家・山伏・行人等の活動を規制したのに呼応して、儒教が奨励されるようになる。薩摩侵攻以降、王府中枢では、薩摩の支配を受け容れる王に対し、薩摩の命に従わない役人たちによるサボタージュや、島津氏の命により中国で購入する物は粗悪品にするような勢力が存在する一方、明朝の遺臣鄭氏一族がオランダ勢力を台湾から追い出して対清抗争拠点とするなか、

殉死の禁止・1663=46歳：清朝による初の冊封が実現し、その謝恩使として三司官の北谷親方朝暢が派遣される。清への朝貢船が、鄭氏から敵と見なされ、攻撃対象となつたため、琉球船の航海安全の保障を鄭氏に求めるよう薩摩藩に依頼している。首里城再建できず、王政にも多大な影響がでるなか、薩摩での請願活動が認められたのか、再建のための総責任者となつているが、冊封使が来琉したために、中止になつてしまつ。

・・・・・・1664=47歳：康熙帝の即位を祝う慶賀使として惠祖親方重孝が派遣された際、福州に入港する直前に暴風に遭い、それに乗じて海賊に襲撃され、皇帝への慶賀品が奪われたという事件が、全て乗組員や福州滞在の琉球人の自作自演であることが判明。薩摩藩により、監督責任を問われた北谷と惠祖は、二人とも斬首、家族も連座となり宮古・八重山に流罪となつた(北谷・惠祖事件)が、これを機に、薩摩藩が朝秀を摂政就任させよう、

酒井忠清大老1666=49歳：この事件の責任をとつて辞任した具志川王子の後を継いで\*早急かつ徹底した改革の必要性に迫られるなか、尚質王の摂政となる。遺された「羽地仕置」に記されたところでは、「薩摩支配下4,50年いかなる理由でこんなに衰退してしまつたのか」と深慮、古い琉球の為政・制度等から日本の近世的なものに琉球自体変化する必要があると、就任の際から、"内訳"から遣わされた"書院の親方"を追い返し、摂政の次席に当たる三司官の伊野波親方に改めて就任要請に来させたように、改革に着手、摂政になるや、間切(まぎり:現在の郡に相当)を設けて、国土再編を始め、日琉同和論によって侵略されて荒廃した琉球人に誇りを持たせるべく、以後、改革の布達文書を次々発して行く。

入鉄砲出女令1667=50歳：三度目の鹿児島赴任、謝恩船派遣の借銀は許可されず、琉球はまたもや自腹で謝恩船派遣を行つた。この間、王府は康熙帝慶賀使の一行に白糖技術を学ぶ者を随行させ、この者たちを砂糖奉行を王府専属の役所として配置、砂糖とウコンの専売制が開始される。

足利学校再建1668=51歳：琉球では建国以来、御嶽(うたき)と呼ばれる聖地で、祭祀が行われてきたが、それが首里城正殿のすぐ横に置かれていたことから、神託を受ける神女とその周りの女官らが、王の辞令や命令を取り次ぎ政事にも影響を与えるようになつてしまつた。それを、王や士族によるものに取り戻すべく、御嶽を離れた場所に移そうと、遠いところにあつた王の台所と入れ替えることとし、神女らの猛反対を、王が温かい料理を食べられるようにするためと押し切つて実現、意識改革への象徴的成果になる。

シャクシャイの乱 1669=52歳：尚質王に替わつた後も摂政の地位に留まり、薩摩から土地の開墾(仕明:しあけ)許可を取り付け、仕明した土地は永々にその所持を許して、とくに砂糖の生産に力を入れて専売制にし、長く行われて来なかつた検地も実施して、財政の建て直しを図るとともに、琉球人の士気の高揚に努め、

・・・・・・1670=53歳：農民らから搾取して冠婚葬祭に大金をかける士族らの意識改革すべく、王府名義で諸士へ各々の系図を提出するよう求め、(家系を持つ上級身分の)系持層には、学文、筆法、医道、容職、唐樂、茶道、算勘、諺、包丁、馬乗、筆道、立花のなかで一つも芸を嗜まない者は、家格が良くとも役人に登用しないとするなど、のちの身分の確立、家を中心とした祖先祭祀に繋がつて行き、薩摩や出向く者にとって諺など日本の芸能、江戸に出向く者にとって唐樂など異国芸能が外交上重要であったばかりでなく、江戸城で琉舞を見た將軍家綱が珍しい音楽に大変喜び褒美まで出したように、琉球民の誇りも生まれるのである。

・・・・・・1671=54歳：この年から5年間に、8間切が新設され、旧來のものも合わせて35間切の体制が出来る。久米村より出された孔子廟創建の請願を自身が許可。11年もの歳月を要して、ついに再建された首里城がは、以前のものよりも良い出来栄えで、自らのリーダーシップと百姓による尽力による賜物であると、自負を示し、

越後屋ホーリー 1673=56歳：\*それまでに発した布達文書に、多くの布達を加えた「羽地仕置」を遺して、摂政辞任して、

談林派俳諧・1675=58歳：没した。尚質王も臨席する国葬式の葬儀が執り行われ、のちに、察温らと並ぶ"琉球の五偉人"になる。没後には尚質王の王子とされ、唐名尚象賢が付けられるが、生存中は只象賢であった。「中山世鑑」は、序・総論を含め全6巻で構成され、地の文については漢字仮名まじり文(和文)で表記されている。第二尚氏王統は、尚清王代の1555年まで記述されている。日本や中国の諸書を縦横に引用するも、為朝伝説を舜天王統紀に接続したり、尚真紀や尚寧紀を欠くなど、薩摩への配慮、中国的な思想との連絡を企図した創作的なものであるが、薩摩に提出されたのは、死後である。王国が所持していた「中山世鑑」は、沖縄戦時にアメリカに持ち去られたが、1953年にアメリカから琉球政府に返還され、現在は沖縄県立博物館・美術館に保存されている。「羽地仕置」の名は、後世に至つて沖縄県庁が琉球資料に収録する際に付けられたものであろうと推測されている。王府内の女官が国王からの要請を取り次ぐという慣習の廃止を筆頭に、役人らの虚礼その他の不正を徹底的に廃止、儀礼や冠婚葬祭に関する規定は一般の百姓たちにまで及ぶなど、国王から百姓までに及ぶ王国内の広範な"意識改革"であったのである。1915年に正五位を追贈されたが、「贈位諸賢伝」の目次には、"はねちともひで"こうしようけん"とルビが振られている。

「人づくり風土記」(沖縄)、新人物往来社「琉球・尚氏のすべて」、「この人どんな人」、平凡社百科事典。Wikipedia「羽地朝秀」、NHK「先人たちの底力 知恵泉」の「琉球王国 サバイバル術」によって大幅に追補、